

表)性教育の必要性を実感する人・しない人の傾向的特徴

分岐の論点	必要としない人の考え方	必要と考え実感する人の考え方
① 人権尊重	努力しない人間に人権を与えるとわがままになり、社会が衰退し、荒廃していくと考える。義務を果たしてこそ権利は保障されるという関係にあると考える。性の多様性に対しては、二分論による考え方に基づいて否定的であることが多い。	すべての人の人権が保障されるべきで、それは人間社会の骨格に据えられるべき理念と考える。人権が保障されてこそ多様なしあわせのあり方が生まれると考える。多様性の尊重を性教育の基本的観点と考える。
② 性的自己決定能力	自己決定による子どもの性行動は間違いのもとと考え、強制力が教育には必要と考え、教え込みに重点がおかれる。総じて子どもの自己決定能力をはぐくむことには後ろ向きである。	さまざまな性行動の局面で賢明な判断ができるためには知識、スキル、価値観、態度、行動のレベルでの判断と選択を大切にしている。
③性教育は「寝た子を起こす」	科学と人権の性教育を実施することで、性的問題行動をより助長するようになるかと考える、またそのように煽る。	子どもは性的生活面で“寝ていない”し、性の学びを重ねることによって人間は賢明な性行動をとるようになるかと考える。
④国のあり方	強い国家があってこそ、国民のいのちとしあわせを守ることができる。だから国民は忍耐し国家に従うべきと考える。	ひとり一人のしあわせが束になって、国のしあわせがあると考える。個人の尊厳を最大限に大切にする国をめざす。
⑤人間観	人間には”まっとうな自立した人間”と“半人前の厄介者”がいて、後者は強制力によって管理する必要がある。	教育と学習によって人間的発達を獲得するのであり、そのためには主体的対話的な学習による深い学びが必要と考える。
⑥両性の平等	性別にはそれぞれの特性があり、男性は“男らしく”、女性は“女らしく”を強調する。性別二分論に基本的には依拠した考え方を持っており、男女は主従関係にあるべきと考える。	性別にかかわらず平等が保障されることで人間的で個性的に生きることが可能になると考える。両性の平等関係は人間の自然なあり方に即した関係性であると考え。
⑦自己変革	自らが変わることには臆病で、伝統的性別役割分業論に依拠して、新たな関係性をはぐくむことに背を向ける傾向にある。	性教育は男性にとって“自己解体”、女性には“自己解放”の側面を持っており、自己変革に挑戦することを成長と捉える。
⑧家族関係	伝統的または新伝統的（主に女性が仕事も家事育児も担う）性別役割分業に安住し、従うように求める傾向がある。	家族という集団の人間関係の発達に、パートナー関係、保護者と子ども関係の創りなおしに挑戦し模索し続けている。
⑨恋愛関係	男中心社会の構造への問題意識は薄く、納得と合意プロセスには関心が乏しいのが実際である。	相手を大切にするということについて、相手の状況や心情に想いを馳せ、納得と合意の形成プロセスを大切にする。
⑩性暴力	男の暴力にはある程度は寛容で許容的であってよいと考える。男女のかかわり方のひとつとして容認することが多い。	人権を踏みにじる行為であり、絶対に許してはならないと考える。犯罪としての認識をしっかりと自覚している。